



夏見台幼稚園・保育園 ニュースレター 2022.9.15 号

夏見台幼稚園・保育園でのこ
わりをニュースレターにまとめます。どうぞご覧ください。
※配信停止の方はメールでどうぞ (info@treponte.jp まで)

〒273-0866 船橋市夏見台 2-16-1 夏見台幼保園

おもちゃが引き出す「自己原因性感覚」とは？

東京大学名誉教授(認知心理
学)の佐伯胖(ゆたか)氏の
著作『わかるということの意
味』(岩波書店)には、大きな
ヒントをいただきました。子
どもの心の奥にある尊厳とは
何か、知ることができました。
それは…



**私には「能力」がある。その「能力」を使って
周りの環境を変えることができる！**

赤ちゃんが、はじめて床
をたたく。音がしてびっく
り！もう一度確かめたくて
たたく。それをくり返す。

これが「**自己原因性感覚**」
が最初に現れた瞬間です。

自分は環境に変化を与える「原因」でありたい、
という欲求です。何か行動を起こせば周りに変
化を与えられる、自分にはその「能力」がある、
ということです。

これは私たち大人も一緒です。つねに上から
指示されてロボットのように動かされていると
嫌になってきます。自分の頭で考えて自分で行
動したいという欲求、これは根源的なものです。

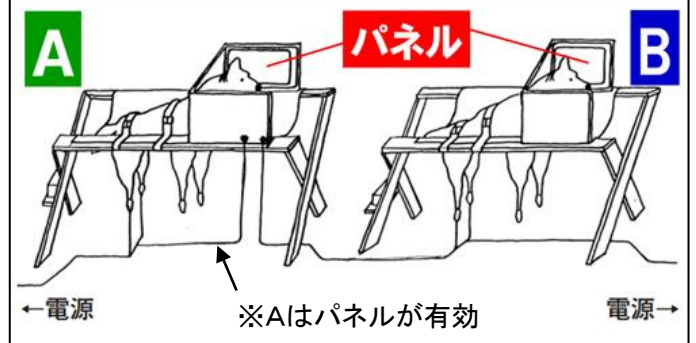
ただここには責任も伴います。それが嫌で他
人の顔色ばかりうかがう人もいますね。指示を
待つ人たちです。



あるいは意欲そのものを失ってしまった人た
ちもいます。周りに変化を与える能力を信じら
れなくなってしまった人たちです。

次の実験は、「**学習性無力感(うつのモデル)**」を
証明した事件です。

電線でつながれた二匹の小犬



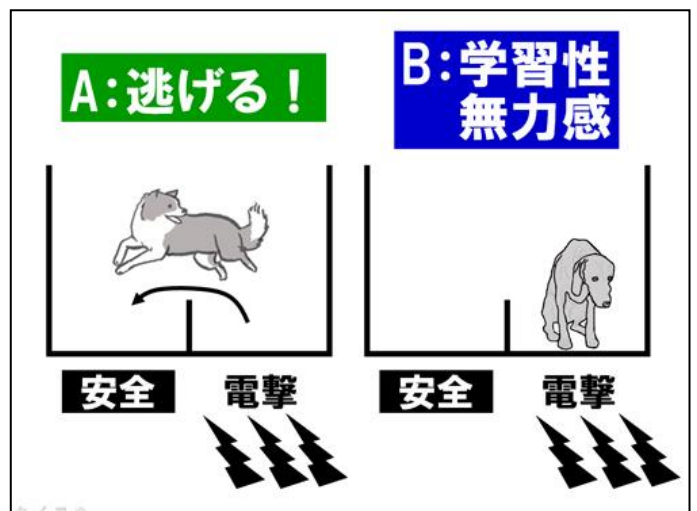
動物愛護の観点から、今ではできない実験で
す。子犬を二匹、電線でつながぎます。子犬は縛
られています。軽い電気ショックを流します。
当然、子犬たちはもがきます。

二匹の子犬はパネルに囲まれています。Aの
子犬のパネルは電線につながっていて、触れる
と電気ショックが止みます。しかしBの子犬の
パネルは無効です。するとどうなるか？

Aは自分の意志で、不快な電気ショックを止
めることを学習します。しかしBはなすがまま。
何をやっても状況は変わりません。

こうしたことをくり返すと、Bの子犬はもが
くことをやめて、不快な電気ショックを黙って
受け入れるようになります。

その数年後、以下のような実験をします。



その子犬たちが成長した頃、今度は犬を縛りつけたりはせず、ただ軽い電気ショックを与えます。

当然ながら、Aは逃げます。しかしBは違いました。簡単に逃げられるのに、ただ耐えているのです。これを「学習性無力感」といいます。

「何をやってもムダだ…」ということを学習してしまうと、何でも自由に選択できる環境を与えても意欲自体がしぼんでしまうのです。

似たような実験が人間でも行われました。個室に閉じ込めて不快な音を聞かせる実験です。人間でも「学習性無力感」が再現されました。

赤ちゃんには自己原因性感覚があります。「自分は環境に変化を与えられるのではないか」とお部屋を探索します。

ティッシュを見つけます。白いふわふわしたものが出ています。引っ張ってみるとまた出てきます。自分が引っ張ると変化が起きる！面白い！ずっとくり返す…

それを見つけたお母さんが「だめ！」とストップします。ダメなものはダメです。ただ、赤ちゃんはティッシュを引っ張りたいたいです。変化を確認したいのです。

そこでおもちゃの出番です。



子どもがカラフルな布を引っ張ります。全部引っ張ると先生が巻き戻します。そしてまた引っ張る…これを満足するまでくり返します。

南部愛子名誉園長は、かつて行った「おもちゃ」に関する子育てセミナーの中で次のように言いました。



「どこでも叩いていいんじゃないくて、叩いていいものを作ってあげる。それがおもちゃなのです。やっちゃだめ！ということは、今その子がやりたいことなのです。だから『なし！』だけではいけないのです」

「これはだめだけど、これはやってもいいよ、というものを作ってあげる。すると子どもの欲求が満たされるのです」

「だめなことはだめ。これは家庭内のルールとして必要ですが、その代わりに、おもちゃで子どもを満たしてあげたいものです」

夏見台幼稚園・保育園には豊富なおもちゃが備えてありますが、それは、

子どもを变化の「原因」にしてあげること

に他ならず、そして、

本当に満足した子どもだけが意欲的になれる

ことだと考えるからです。

(終)